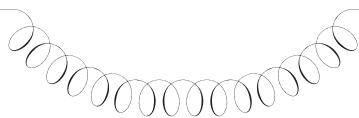


宣教司牧方針策定のための 10の課題まとめ



カトリック東京大司教区



もくじ

はじめに 宣教司牧方針策定のお願い	4
概要	6
各課題のまとめ	7
セクション1 「神の言葉を告げしらせることとあかし」	7
課題1 ●修道会の垣根を越えた、教区における司牧協力体制の充実	7
課題2 ●滞日外国人司牧の方向性の明確化と見直し	9
課題3 ●継続信仰養成の整備と充実	11
課題4 ●現行「宣教協力体」の評価と見直し	13
課題5 ●カトリック諸施設と小教区・教区との連携	17
セクション2 「秘跡を祝うこと」	20
課題6 ●イベントの豊かさだけでなく、霊的にも豊かな共同体の育成	20
課題7 ●信徒の多様性を反映した典礼の豊かさの充実	21
課題8 ●文化の多様性を尊重した典礼の豊かさの充実	24
セクション3 「愛の奉仕を行うこと」	26
課題9 ●教区全体の「愛の奉仕」の見直しと連携の強化	26
課題10 ●東日本大震災への取り組みに学ぶ将来の災害への備えの充実	28
今後の展開：宣教司牧方針策定を目指して	30

はじめに

宣教司牧方針策定のお願い

2018 年の降誕祭に際して、東京大司教区教区長タルチシオ菊地功大司教は、「宣教司牧方針策定のためのお願い」を降誕祭のあいさつの中で明らかにしました。そこには次のように記されています。

「教区司教としての私は、確かに教区の方向性を定める最終的な責任を担っています。しかしそのことは、私が一人で判断し決めたことを公示し、皆様に実施していただくことを意味してはいません。教区司教として最終的な責任は私が負いますが、基本的に多くの方々の意見を伺い、可能な限り様々なレベルでの意見交換の上で、方向性を定めていきたいと私は考えています。とりわけ、宣教と司牧に関することは、司教の独断で方向性を定めることは避けたいと思います。」

すでに 2018 年の聖霊降臨祭に大司教が発表した『多様性の一致を掲げて』の中で宣教司牧方針策定のために東京教区が取り組んでいく課題として 10 の項目が記されていました。これらの課題について、これから、それぞれの共同体で話しあいを行い、意見を交わした結果を集約して、文書で提出するようと呼びかけました。

年が明けて 2019 年 3 月に『東京教区宣教司牧方針策定への協力をお願い』と題した文書が東京教区内の小教区、修道会に送付されました。そこには先に呼びかけた 10 の課題について教区をあげて取り組んでほしいとの大司教からのお願いが記されていました。話し合いのための 10 の課題とは次の通りです。

1. 修道会の垣根を越えた、教区における司牧協力体制の充実
2. 滞日外国人司牧の方向性の明確化と見直し
3. 継続信仰養成の整備と充実
4. 現行「宣教協力体」の評価と見直し
5. カトリック諸施設と小教区・教区との連携
6. イベントの豊かさだけでなく、靈的にも豊かな共同体の育成
7. 信仰の多様性を反映した典礼の豊かさの充実
8. 文化の多様性を尊重した典礼の豊かさの充実
9. 教区全体の「愛の奉仕」の見直しと連携の強化
10. 東日本大震災への取り組みに学ぶ将来の災害への備えの充実

話し合いのためには、①個人の意見ではなく複数の方々の意見の交換、②祈りの雰囲気の中で話しあいを実施する。③一つの項目につき概ね A4 用紙 2 ページを超えない範囲とし、記名と所属小教区を明確とする。④積極的で前向きな提言。という注意が記されていました。意見聴取の締め切りは 2019 年 6 月 9 日でした。

本文書は、東京教区の皆さんから寄せられた「東京教区宣教司牧方針策定」のための 10 の課題についての話しあいと意見交換の記録のまとめです。概要、各課題のまとめ、最後に今後の展開の順で記されています。各設問のまとめでは課題の簡単な説明と、現状の報告、提言、そして回答を受けた後での所感を付け加えました。

概 要

寄せられた意見の数々は73通でした。A4用紙にして100ページを超えるものとなりました。その内訳は宣教協力体から1、小教区から28、小教区内の団体、グループから12、修道会から7、司祭（団）から1、個人など24通でした。

寄せられた意見は作業グループ（菊地功大司教、小西広志神父、サンティアゴ・ディンド神父、浦野雄二神父）が取りまとめに関わりました。寄せられた意見を熟読し、内容ごとにスクリーニングを繰り返す実務については小西神父が中心となって担当し、小委員会で報告と文章化の作業を複数回行いました。寄せられた意見の表現をできるだけ損なわないようにして、各課題ごとにまとめました。

各課題については、説明（課題の背景について）、現状（寄せられた意見の反映）、提言（課題と向き合う参考として）、ひとこと（作業グループの所感）という形でまとめられています。

各課題のまとめ

セクション 1

「神の言葉を告げしらせることとあかし」

課題 1 ● 修道会の垣根を越えた、教区における司牧協力体制の充実

■説明■

東京教区には多くの男女修道会が存在します。それぞれの修道会は自分たちのカリスマと使命に従って福音宣教に励んできました。その働きは教会を豊かにし、数知れない実りをもたらしてきました。

しかし、召命が少なくなり、奉獻生活者が減少していく中で、自分たちの固有のミッションに固執するだけでなく、それぞれの修道会が東京教区のもとに集い、相互に協力し、さらには司祭団と連携をして、司牧と福音宣教の充実を目指していく必要があるでしょう。

●現状●

少ない受洗者：修道会が経営する事業体と関わりのある人々の中から洗礼を希望される方が非常に少ないとの指摘がありました。とりわけ、かつて幼稚園など幼児教育の現場は福音宣教にとっての貴重な手だてとなっていました。現状では卒園生、保護者から洗礼を受けられる人はほとんどいません。

教区民として自覚：また、修道院単位としては近隣の小教区のために信徒と共に奉仕することはあるものの、修道会として教区に対して何ができるのか、何をすればよいのかを考え、深めていくことができません。修道会自身が東京教区の一員であるという自覚が足りないからだと思います。

大規模な小教区のみが活性化：現実として、修道会に司牧が任せられている都心の大きな小教区ばかりが信徒が増え、大きくなっています。大規模な小教区のみが活性化しているという現実に疑問を感じます。

◆提言◆

大人の教会学校：高齢化し活力を失った修道会にはもはや頼れません。そこで、教区単位で「大人の教会学校」のようなものを組織したらどうでしょうか。こういった組織で学んだ信徒たちが修道会などが運営する幼稚園、保育所、病院等に出向き、人々のためにカトリック入門講座を実施してみたらどうでしょう。

修道会協議会：大司教様の文書に教区の修道会協議会の設立について書かれていますが、この協議会がどのような内容のものか大いに関心があります。教区単位での修道会の連帯を通して具体的な協力体制が生まれていくように思います。

土地建物の活用：東京在住の修道会においては、撤退、縮小などの現状がありますが、広大な敷地、建物等、教区の宣教活動の場として活用できるものもあると思います。

長上との取り決め：教区長と関係修道会の総長ないし管区長との間で取り決めを作り、具体的な協力拡大、実施を教区ベースで進めるべきです。

祈りの集い：司牧活動だけではなく修道会の垣根を越えた祈りの集いを催したらよいでしょう。

ひとこと

寄せられた回答を拝見して、信徒の皆さんは修道会には期待をしつつも、実際の小教区での活動や運営にはあまり積極的に修道会が関わっていないところに不満のようなものがあるのだと感じました。修道会からすれば会員の減少と高齢化のために、自分たちの将来像がなかなか描けないのが現状であるようです。それでも、教区の修道会協議会の設立と修道会が所有する財産の有効活用についての教区への期待感があることは分かりました。

課題2 ● 滞日外国人司牧の方向性の明確化と見直し

■説明■

現代の日本社会は諸外国からの移住、滞在者なしには成り立っていきません。日本は他民族・多文化が集う社会へと急速に移行しています。事実、多くの諸外国の方々がカトリック教会を訪れています。都市部の教会では言語別の典礼などがすでにおこなわれていますし、都市周辺部の教会では諸外国の方々とその子どもたちが、教会共同体の担い手として活躍しています。教会は現代社会を写し出す鏡のような存在です。急速に増える滞日外国人の方々とどのように信仰共同体を造り上げていくのでしょうか。それが日本の教会にとって喫緊の課題となるでしょう。

●現状●

次世代を担う：年齢構成が日本人よりも若いことから、外国人信徒は将来の日本国内の宣教・司牧活動の役割を担う貴重な存在であるし、将来も信仰共同体にとって大切な存在となるでしょう。そこで、外国人信徒にも東京教区の宣教司牧方針を理解してもらうことが必要だと思います。

安心できる場所：ある小教区では難民支援を行っていますが、それはCTICのスタッフやボランティアなど小教区以外の人々の支援を受けてのものです。こういった教会の活動と教会の雰囲気は、難民とボランティアの方々に非常に好かれています。事実、キリスト教徒だけではなくイスラム教徒も「ここに来ると守られている気がする」、「ここにいるスタッフ、ボランティアは私の家族です」という声も寄せられています。

信頼できない：ある小教区では日本人グループと外国人グループとの交流は大変少ないとの報告がありました。その原因は外国人グループが日本人グループに従属して、付属している状態だからだといいます。日本人信徒の中に月定献金を収めることにより小教区の財政が保たれているという認識が強い方々います。ミサ献金のみで小教区所属という帰属意識の低い外国人信徒

はあまり信用できないという感情が日本人信徒に強く残っています。

戸惑い：教会共同体の運営が日本人の手中にあり、そのためか外国人信徒の教会共同体に対する帰属意識が低いと感じます。外国人信徒の人数は大幅に増加していますが、受け入れ態勢に課題が残されています。他言語・他文化の方々との信仰共同体づくりに戸惑いがあります。

場所貸し：複数の司祭たちからは教会が外国人グループのために単なる場所貸しに終始しており、その司牧責任主体がどこにあるのか不明瞭のままであるとの現状報告がなされました。特に、近頃はベトナム語のミサ参加者が大変多く、その司牧活動に対して誰かが責任をもって行っていくことは緊急の課題であるとの意見もありました。

◆提言◆

日本にある教会：東京教区が「日本（人）の教会 Japanese Church」ではなく、日本にある教会 Church in Japan」を目指せたら理想でしょう。

距離感：外国人が抱える非正規滞在・就労・子どもの教育の問題に日本人が関わり、支援することにより外国人信徒との距離感も近くなってきました。これらの活動を教区内でよく知ってほしいです。

支援の増員：外国の方々への関わりについて教区内でノウハウ共有ができたらよいと思います。そのために、支援していただける CTIC 等の相談員を増員してほしいです。

協力体制：小教区・修道会・カトリック諸施設、市民団体などと協働して、難民への関わりを通じて「愛の奉仕」の実践を継続する体制を整えることをお願いします。

意識改革：一つの共同体として共通の目標に向けてよりよい、司牧・宣教の実現にむけて、共に努力していく意気込みを鼓舞する方針を強く出していきたい。こういった方針は、日本人信徒の意識改革に必要ではないかと思います。

ひとこと

教区内の地域性が浮き彫りになった回答だったと思います。千葉県内の各

小教区と都内の一部の小教区にとっては滞日外国人と共に教会共同体を作り上げていくのは現実の課題だといえるでしょう。その一方で、都内の多くの小教区では滞日外国人はいまだにゲスト扱いであり、彼らを助けてあげましょうという意識が先行し、真の連帯を作るまでには至ってないようです。それぞれの小教区がおかれた地域性と特色を踏まえて、滞日外国人への関わりをおこなう必要があると思います。また、技能実習生と呼ばれながらも低賃金で酷使されるアジアの若者たち、故国に戻ることはできず、しかも日本政府からの難民認定も受けられない方々、入管の施設で無為な時を過ごさなければならない人々、こういった日本の社会のなかで隅に追いやられて小さくされた外国籍の方々のことは忘れてはならないと思います。教区で滞日外国人への関わりの指針のようなものを作成できたらよいでしょう。

課題3 ● 継続信仰養成の整備と充実

■説明■

わたしたちの信仰は教会ならびに信仰共同体を通じて育まれます。キリスト信者はキリストの背丈に達するまで、自らの信仰を深め、成長させていく義務を負っています。神から教会を通していただいた信仰の恵みを豊かにしていく努力を怠ってはならないのです。しかしながら、個人主義が横行する現代社会にあって、共に信仰の歩みを進めていきましょうという呼びかけは信者一人ひとりの心に響いているかどうかは疑問の余地があります。

●現状●

継続した関わり：福音宣教の使命を果たす信仰者の養成も大切でしょうけど、洗礼後、あるいは堅信を受けた後のフォローと養成の継続が必要だと感じます。親戚や友人の中に信者がおらず、自分だけが信者という成人洗礼や堅信の場合、折角の信仰が身につかないままにいつのまに教会に来なくなるケースが多いとの現状の指摘がありました。

小教区での学び：洗礼を受けて、信仰生活、教会生活を送ってくるなかで、キリスト教の教えの系統的な学びというものがむしろあまりなかった事実です。しかし、小教区生活の中では実務を通しての学び、それを通じての信仰の成長が実感されているのも確かです。信仰の学びの中心には、ミサとミサの中での説教、そして司祭が行う各種の講座があると思います。かつて開催された教区主催の講座（聖体奉仕者・集会司式者向け）は信仰を深める上でとても有益でした。

分かち合い：信仰体験の分かち合い、みことばの分かち合いは必要不可欠だと思います。教会共同体での奉仕の協力、またみことばや教会の教えを学ぶ会などは信仰を育む上で必要だと思いますが、お話し・講話・講演を一方的に聴くだけでなく、自分で信仰経験を語り、仲間の話を聴くなどのことを通じて、さらには聖書や典礼、教会生活慣習、歴史などについて素朴な疑問を打ち明け合うことを通じて、信仰の理解が広がっていくように思います。

洗礼を受ける前に教えを聞いても、その時は十分に理解できていないのではないのでしょうか。だからこそ洗礼を受けた後の長い信仰教育は洗礼前よりも大切だと思います。

◆提言◆

特定の方法論：「聖書 100 週間」を信仰養成の一つの方法として、広められることを提言します。

司祭の生涯養成：司祭の心理的ならびに霊的養成は必要でしょう。司祭の成熟が、信徒の信仰の成熟へと結びつくと思います。

分かち合いのために：信仰養成のための信徒同士があつまり、霊的、具体的な問題を分かち合う場、お互いの人生にかかわっていく機会を設けたらよいと思います。

親子の信仰講座：親が遠慮して子供を連れて教会へ来ることができない現状があります。親子のための、つまり親が気兼ねせずに参加できるミサや、親子の信仰講座のために小教区の枠を越えて場所と機会を設けてほしいです。

小教区の中にある資源：「小教区での学び」とは何かが求められています。小教区にある特徴は、さまざまな年代・地域・教会の経験を持ち寄って集まってきた信者の個々の歩みの中に、学び合う資源や宝が含まれていることでしょう。

カテキズムのテキスト：信仰の継続養成のためカテキズムを目的としたテキストの作成をお願いしたい。

ひとこと

小教区での信徒の養成は、主任司祭任せでした。しかし、今年度より教区カテキスタの養成が始まったのをきっかけに、例えば、教会学校・日曜学校のリーダーの養成、典礼についての生涯養成など教区単位での生涯養成への取り組みが可能だと考えています。さらに、教区内で働く司祭団の生涯養成の必要性も実感しています。また、ご指摘の通り新受洗者にとって、新しく始まったキリスト者としての生活をさらに実りあるものとするための講座は是非とも必要でしょう。

課題4 ● 現行「宣教協力体」の評価と見直し

■説明■

東京教区では2003年に宣教協力体を設けました。あれから時を経て、宣教協力体はわたしたちの教会生活にどのように影響を与えているのでしょうか？評価と見直しを通して、新たな宣教協力体の枠組みづくりに着手できたらよいと思います。

●現状●

定期的な集まり：ある宣教協力体では、およそ2か月に1回のペースで各教会主任司祭、教会幹事が集まり、情報交換をしています。各教会の動向・行事、集会祭儀者の「相互乗入れ」分担を把握し、実行するように努めています。

近隣の小教区への無関心：また、別な宣教協力体は、それぞれの小教区が修道会の運営で司祭の人数にも恵まれています。小教区だけでも十分な教会活動を行っていきます。しかし、近隣には受講者のニーズに合った独自の入門講座を行うことが難しい小教区あるのも事実です。このような教会共同体に対して信者同士の交流を図ることが大事だと考えていますが、現行小教区による枠組みを越えた相互意識が生まれにくいのが現状です。

地理的な条件：教会の大きさの違いや、隣接の教会の距離など地理的な条件により宣教協力体がなかなか機能していないというのが実状です。

関わりの創設：宣教協力体制度が実施されるまでは、近隣であっても小教区の信徒との関わりがほとんど無いに等しい状況でした。「福音的使命を生きる」という制度発足の中核となる大司教様のメッセージをどこまで実践できているかは定かではありませんが、宣教協力体に所属する四教会といくつかの修道会のみなさまとの交流は非常に有意義なものであります。

見直しの必要性：2002年の「『福音的使命に生きる』—新しい一歩のための提案—」から時が経ち、最初の目的が薄れてきたと思います。今一度、宣教協力体の必要性を確認すべきだと思います。また地域、交通の便なども考慮して宣教協力体の編成も見直しする必要があります。

未来像が見えない：小教区共同体の、さらには宣教協力体の未来像が描けないでいます。各小教区の10年後、ないしはその後の将来を思い描きたいとは考えていますがルーティンな教会運営に忙殺されるばかりで山積みする課題を先延ばししているに過ぎません。次世代に向けた本来的な検討・アクションプランの策定を行うに至っていないというのが実情です。現在の宣教協力体ならびに小教区を今のままの状態であと5年延命させるだけであれば、いま残された人材でなんとか持ちこたえることはできると思いますが、その先のイメージを描けないでいます。

目的や意義がわからない：宣教協力体は地域の小教区との連絡報告会のようなものとして存続しています。あまり有益であると思われません。教会学校の協力という点では多少のつながりが役立っているのは確かです。しかし、

その事実と、宣教協力体の存在とが密接に関係しあっているわけではないでしょう。小教区において広くこの制度があることを知っている信徒は少なく、一般に何のための制度かも明確に分かっていません。教区が何の為にこれを設置しているのか、その目的や意義がわからないというのが本当のところです。

◆提言◆

交流：信者同士の交流を図ることが大事です。現行の協力体の枠を超えた相互意識の高まりを育てることが望まれます。具体的には宣教協力体でバザーなどを実施してみたらどうでしょうか。

地域性：宣教協力体の考え方はむしろ千葉地域のような教会同士が遠いところでこそ必要なシステムにしなければならないのではないのでしょうか。

司祭の協力：司祭の中には宣教協力体に対する理解が乏しい方がおられ、小教区間の協働に対して非協力的ということもありました。司祭たちの間でも宣教協力体の在り方、意義についてよく話し合っていただくことが重要だと思います。

宣教協力体相互の協力：本制度の今後の課題としては、宣教協力体の所属教会が制度発足時から変わっていないため、特定の教会との交流でしかない点をどのように克服していくかという点が挙げられます。宣教協力体に所属する教会を単に組み変えるだけでは距離の問題もあり、各教会が協力して行う活動が困難になることも予想されますので、現在の宣教協力体の構成を変えるのではなく隣接する宣教協力体との交流を教区主導で推奨していくことも一つの見直し案になるのではないかと思います。

宣教司牧評議会への期待：改めて宣教協力体の活動目的と重要性を確認し、編成を見直す。その上で、宣教協力体の主任司祭同士が共通の意識を持ち、指揮系統を明確にしたらどうでしょう。各小教区における組織やルールを共通に、もしくは歩み寄れるよう柔軟に対処できるようにする。宣教司牧評議会を見直し、意見交換だけでなく、行動を伴った活動母体とする。

痛みを伴った小教区の統廃合：物理的・精神的に孤独・孤立の問題に苦し

んでいる方々、そして、いまだに不当な扱いを受けながら日本に貢献してくれている外国人居住者の方々にこそ教会は力を注いで向き合うべきなのではないでしょうか。東京教区としてそれらの問題に対応するために既存の小教区の統廃合をおこない、同時に求められる地域での小教区の新設といった抜本的な改革が求められていると思います。こういった教区の意向であれば、その趣旨を重く受け止め、改革に伴う痛みを受け入れてわたしたち自身の小教区・協力体の将来像を模索してまいります。

大きさの違い：サイズのそろった教会同士での宣教協力体を望みます。宣教協力体内の小教区のサイズが違いすぎて、宣教について積極的に協力していくことが難しいからです。結局、情報交換レベルにとどまっているのは残念です。宣教に向けた具体的な協力体制を実際に模索するならば、ある程度サイズのそろった教会同士でないと難しいのではないのでしょうか。そのためには教区本部からの強いリーダーシップは必要でしょう。

信仰を養成する場へ：これからの宣教協力体は信仰を養成し、交流する場になってほしいです。またそれぞれの小教区が直面している課題などを互いに持ち寄りともに解決する場になってほしい。

ひとこと

宣教協力体については教区でも見直しを考えています。また、休会しておりました宣教司牧評議会も2020年度には再開を目指しております。東京都区内と千葉県では宣教協力体のあり方が異なることに、今回皆さまのご意見から気づかされました。なぜ宣教協力体が必要なのか、その意義と目的をはっきりとさせなければならないと思います。行事をするためだけに宣教協力体が存在している訳ではないですので、一体何のために宣教協力体が必要なのかについて掘り下げていくことが求められていると思います。また今、実際に宣教協力体は存在しておりますので、それぞれの協力体が直面する課題や問題点をよく把握することが大切です。そして、現状に見合った宣教協力体を再構築していけたらよいでしょう。

課題5 ● カトリック諸施設と小教区・教区との連携

■説明■

教区内には多くのカトリック施設があります。これらの施設は小さな子どもたちから、児童、生徒、学生、そして高齢者までを対象としています。また、病気の方々、貧しいの方々、苦しみ悩むの方々への関わりもの積極的に行われています。多様化が進む現代社会において、これらの施設が取り組んでいる活動と、東京教区はどのように連携の可能性があるのでしょうか？信仰共同体にとって近隣のカトリック施設は福音宣教のための貴重な手だてとなると思います。

●現状●

希薄な関係：教会共同体と隣接する幼稚園の関係が希薄となりつつあります。この原因はいくつか考えられますが、幼稚園の運営主体が宗教法人から切り離され学校法人となったことが大きいでしょう。また司祭やシスターが園長職を離れたのも少なからず影響があると思います。結果として信徒の職員が減少し、父兄を対象とした信仰講座が開けなくなっています。

形骸化：多くのカトリック施設では、創設に関わった各修道会・修道女会の高齢化が進み、信者以外の人間に責任主体を任せざるを得なくなっているのが現状です。そして、カトリック施設といえども、施設長が一般の方になり、なおかつ職員の大半は信徒ではないという現実のにあって、カトリックの精神の継承が難しくなりつつあります。創立の精神（建学の精神）があるものの、形骸化してしまっています。こういったカトリック施設は通常業務のなかにどのように創立者の精神を生かしていくのでしょうか。

教会側からの連携の意味：カトリック系の保育園、幼稚園、学校とか老人ホームであっても、公的な施設という点から制度の上での制約があります。かつてのような慈善の意向で関わりを成り立たせていくのは難しくなっています。施設側がキリスト教の精神、カトリック教会との連携をとりわけ必要

と感じていないとした場合、教会側からのこれらの施設への連携の目的は何になるのでしょうか。

ミッションスクール：ミッションスクールとの連携は大きな課題であると思います。

◆提言◆

キリスト教が身近に感じる取り組み：キリスト教講座の開講等などが考えられる。どれも従来実践されたことのある施策ではあるが、取り組みが不十分ではなかったか小教区や教育機関においても一度現状を見直しながら、多様な窓口、関わるきっかけとなる機会を用意し、未信者の方々にキリスト教が身近に感じられる取り組みができるよう、教区の主導でカトリック諸施設とさらなる環境整備を行ってはどうか。

時代にあった取り組み：小教区での信仰体験についての交流が、少子高齢化のためなのか、難しくなっている（体力が衰えてきている）。そのため、時代にあった新しい仕組みを作らなければ、じり貧になっていくことが予測される。

カトリックセンター：多摩地区にカトリックセンターのようなものを開設してみたらよいだろう

カテキズムのテキスト：信仰の継続養成のためカテキズムを目的としたテキストの作成をお願いしたい。

ひとこと

教区内あるカトリック諸施設と小教区が無関係に存在しているような印象を寄せられた回答から抱きました。小教区に集う信徒の皆さんにとって、近隣の諸施設は「自分たちの大切な仲間」という意識が生まれたらよいかと考えます。このようにして共に福音宣教を担うパートナーとお互いになっていくでしょう。しかしながら、カトリック諸施設がより公共性の高いものとなり、かつてのようなキリストの愛に根ざした自由な活動ができなくなっているのも事実だと思います。教区としては、例えば諸施設へチャプレンとして司祭・修道者、ならびに信徒を派遣し、神の愛を伝えるような働きを果たす

ことができるのではなかろうかと考えております。そのためにはカトリック諸施設への地道な働きかけが今後とも必要でしょう。

セクション2

「秘跡を祝うこと」

課題6 ● イベントの豊かさだけでなく、靈的にも豊かな共同体の育成

■説明■

小教区が行事やイベントの実施に終始していないでしょうか。教会の中心に秘跡を祝うという典礼があります。典礼はすべての教会活動の源泉となります。信仰共同体が靈的にも豊かになり、信徒一人ひとりが主イエス・キリストにさらに深く結ばれるためにどのような取り組みができるでしょうか。

●現状●

一日祈りの集い：東京教区のいくつかの教会を会場にして個人同伴による一日祈りの集いをずいぶんと続けています。この集いは信徒が祈る習慣を身に着けていくよい機会となっているようです。

小教区の保護の聖人と共に：毎年、秋に小教区の保護の聖人のお祝いを3週間ほどかけて行います。そこでは、さまざまな行事を組み込んで実施しています。「秋の教会文化祭」といった趣です。講演企画・作品展・コンサート・カフェなどが行われます。この期間中、保護の聖人について学びますし、創作作品の発表を通して信徒間交流が目指されています。

靈的にも豊かな共同体とは？：小教区では行事はたくさん作るが、その一つひとつが靈的な成長に結びついているのか検証できません。実のところ行事に追われているという感じがあります。イベントは豊かだが靈的につながっているかは疑問です。そもそも小教区の中に共同体というものがあるだろうか？信徒同士が真につながっているだろうか？と疑問を感じます。

◆提言◆

学びと奉仕の会：定期的な聖書の勉強会やキリスト教についての学びを小教区内で毎月行う。信徒は日曜ミサのみならず、こういう集まりへの参加を

通して交わりのなかで成長してゆくでしょうし、ひいては小教区を豊かにしていくでしょう。また、教会組織や奉仕の仕事について自覚を促すようなセミナーを開催したり、それぞれの奉仕グループごとに役割、目的、機能についてのセミナーを開いてみたらどうか

祈りのある共同体へ：祈りを実践している小グループは長く続いていきます。そこで、小教区の中で祈りへの関心と霊的訓練の機会を持つように試みたらどうか。聖書（みことば）を読み、心が響くところを味わい、分かち合うことで小さなグループでありながらも主イエス・キリストがいらしてくださることを実感できます。日常の生活の中に働きかけてくださる神（聖霊の働き）に気づく心を育てるのは必要だと思います。

修道会による霊的な指導：豊かな典礼と、霊的な成長のために司教が個々の信徒を励まし、修道会からの霊的指導を強めてください。

豊かなミサ：信徒相互の連帯感を育むようなミサとなっていくように各小教区で取り組んでいくことを教区は促してください。

グループによる交流：小教区、司教区での多様なグループ作りと交流の機会をつくってください。

ひとこと

小教区の活性化がバザーなどのイベントだけでなされているのだとしたら、大変残念に思います。典礼こそが信仰共同体に神のいのちを吹き込むのです。とりわけミサ聖祭は信仰共同体にとっての原点であり、また立ち返っていく源泉でもあります。教区単位でミサについての豊かな理解を求めていくための講座などの開催が必要であると感じます。

課題7◎ 信徒の多様性を反映した典礼の豊かさの充実

■説明■

教会にはいろいろな人が集います。なぜなら主イエス・キリストが、人々

を教会に呼んでくださったからです。ですから、教会はいつも多様性という特色を備えています。誰もが受け入れられ、祝福され、満たされる典礼とはどういったものでしょうか？また、信仰の表現には多種多様なものがあります。聖母マリアさまへの敬愛の念を強く抱く人。静寂の中で瞑想し神との合一にあこがれる人。仲間たちと共に祈り、歌いながら神を讃美していく人。家族や隣人への奉仕を通じて、キリストの愛に生きる人。みことばにうながされ社会の正義と平和の実現のために活動する人。小教区の共同体には病気などのために出向くことは難しいものの、人知れず病床で祈りをささげる人。教会の中には様々な信仰の姿があるのです。しかし、いつの間にか特定の枠にはめ込んでしまうような信仰を生きようとはしてはいないでしょうか。そして、小教区が閉鎖的なものとなっていないでしょうか。

●現状●

外国籍の信徒の中心に：小教区では日本人の小学生がほとんどいないという現状となっています。宣教協力体の活動を通して教会間の交流を深めいきながら、外国籍の信徒が小教区の中心になるようにできないでしょうか？

外国籍の信徒から学ぶ信仰表現：司教団からの指針として、自由であるといいながら、各地の教会ではひざまずき台が取り払われたり、聖変化中にもひざまずくことは必要ではないとの呼びかけに戸惑いを感じます。わたしたちの小教区には多くのフィリピン出身の信徒がいます。彼らの信仰表現にはこころ動かされます。典礼が本来備えているであろう自由な表現を求めたいです。

◆提言◆

新しい信仰運動体：「信仰の多様性」を推奨するなら、教皇様が認めた信仰運動体への参加は認めるべきではないのでしょうか？第二バチカン公会議に前後して新しいスタイルの多くの宣教会が生まれたと聞いています。教皇様が応援、支援されている運動がわが国でも存在しています。東京大司教区でも、同じカトリックの霊性であるなら、個人的にピッタリな共同体を選ぶことは喜ばしいことだと思います。

教会の属していない人たちへの配慮：外国人が多いせいか聖歌はすべて英語で行われています。それはそれでよいのですが、信者ではない日本の方が教会にいらした時、英語の聖歌ではすぐに歌えるだろうかと不安に思います。多様性を認めた結果、教会へのハードルが高くなってはいないでしょうか。自分たちだけではなく、外にも目を向けるべきです。

若者たちと共に：これまでの典礼とは異なった若者たちが希望し、楽しめるミサ典礼を考え、実施してみたらどうでしょうか。

ひとこと

信仰の表現には多様性があるよいのではないかと考えます。ロザリオ、十字架の道行き、レクチオデイヴィナ、瞑想など教会の中には多様な信仰の表現が存在します。さらに、教会には様々な方々が集います。誰もが喜びと癒やしを得られるような典礼を目指すためにはどのような工夫が必要かが問われているでしょう。回答の中に信仰共同体のなかでマイノリティーな存在となりがちな障がい者、聴覚・視覚障がい者、子どもたち、高齢者、LGBTQ への配慮という発想が展開していなかったのは残念です。また、親しい人の死、離婚、人生の様々な哀しみといったものに直面している人々とどのように主の食卓を囲み、平和のあいさつを交わしあっていくのかということについての言及がなかったのも残念でした。

なお、教会のなかで行われている様々な信仰運動体については、注意が必要だと考えています。こういった運動体はある種の活気を与えてくれるのは事実ですが、それが信仰共同体のすべての人に当てはまるとは限らないからです。ともすればこういった信仰運動体のおかげで信仰共同体が分裂し、信徒の間の一致が損なわれかねない状況となります。これは避けねばならないでしょう。こういった様々な信仰運動体については教区司教の指導と指示に従っていただきたいと思います。

課題 8 ● 文化の多様性を尊重した典礼の豊かさの充実

■説明■

近年、教会にはいろいろな国の人々が集まるようになりました。信仰共同体の中では様々な民族や文化が交差し、他文化との出会いと交わりが生まれつつあります。言語の違い、習慣の違いを乗り越えながら共に主を賛美する共同体になるためにどうしたらよいのでしょうか。

●現状●

信仰は一つ、小教区は一つ：信仰は一つ、小教区は一つというモットーのもとに、言語の異なる方々と、一緒にミサにあずかることを目指してきました。40年間にわたる試行錯誤の結果、現在ではコンバインド・マス（英語主体・日本語主体）が月に二度ささげられています。小教区の行事はすべて出身国に関係なく皆一緒に行うように努めています。

無理や無駄を乗り越えて：月の第二日曜日のミサは Change Day と呼んでいます。第一朗読を日本人が英語で、第二朗読を外国人が日本語でおこないます。このような取り組みをしてすでに2年が経過しました。外国人も日本人も多少なりとも無理が生じます。仕事や学校以外で努力する無駄なことだと感じることもあります。不得意な言語を練習するのですから。外国人の方は子供も大人も積極的に参加してくれます。外国人の方々が主の祈りを日本語で唱えたいという希望を伝えてくれました。教会が歴史の中で長く存続してきたのは、無駄や無理をものとしなかったからだと思います。今の取り組みは今後、日本人であれ外国人であれ信仰生活の中に必ず生きてくると信じています。特に将来のある外国人の子供たちにはよい体験だと思います。

◆提言◆

多言語のミサの奨励：多言語によるミサへの取り組みを教区の一つのテーマとして位置づけてください。こうして外国人の方々との「一致」を更に推進されると思います。こういった多言語によるミサのおかげで、まるで聖霊

降臨の時に人々が異なった言語で話しながらも同じ信仰を保ったときのように、教会が多文化の賛美を行うことができると考えます。

教会とつながる：多言語の典礼のおかげで多くの外国籍の人々が教会とつながると思います。

イエスの名のもとに：国際色豊かな典礼があってもいいと思います。歌や共同祈願だけでなく、南米やアフリカの方々のようにミサの中で踊ることもあってもよいでしょう。様々な国の様式を取り入れて「イエスの名のもとに世界中から集った！」というミサをイメージできたらと思います。

ラテン語のミサ：時にはラテン語のミサを実施してください。

統一した祈願文：英語を交えたミサを行っているが、いわゆる「聖書と典礼」の日本語版と英語版の祈願文の内容が違うので、統一したものが欲しいです。

ひとこと

文化と言語の違う人々と共に典礼をおこなうことは、配慮とエネルギーを必要とするものです。しかし、多くの小教区で多言語のミサを実施していることはうれしいかぎりです。その一方で小教区が言葉の違う人々への場所貸しになっている点も見逃せません。典礼の中でまとまらなければ信仰共同体を作り上げることはできません。多文化・多言語の典礼への積極的な参加をお願いしたいです。また、こういった文化が交差する典礼は、いつも試行錯誤が必要となります。そうしないと、典礼の生き生きさが失われ、儀式化してしまいがちだからです。信仰共同体に集う多くの人と対話を重ねながら、自分たちにふさわしい典礼を作り上げていく努力を惜しまないでいただきたいと思います。

セクション3

「愛の奉仕を行うこと」

課題9 ● 教区全体の「愛の奉仕」の見直しと連携の強化

■説明■

教会はその始まりの頃から、隣人への「愛の奉仕」を実践してきました。実際、教区内でも個人で、グループで、小教区で様々「愛の奉仕」がなされています。社会が大きく変化し、さらには小教区共同体が高齢化していく中、今まで実践してきたものを見直す必要はないでしょうか。また新たな展開を考える必要はないでしょうか。

●現状●

組織の複雑化と肥大化：組織が専門的になってくると法的な側面が生じます。その結果、カトリックの精神で生きづらくなってしまいます。教会も修道会もあまりにも組織化しすぎているように思います。福音的に大切なことよりも末端のどうでもよいことにエネルギーを取られすぎているのではないのでしょうか。識別が求められていると思います。

孤立する大きな小教区：大きな小教区は人材、環境が整っているので、様々な奉仕活動が可能となります。しかし教区内の他の小教区と連帯して「愛の実践」をおこなうという発想は生まれてきません。

地域の人々の協力を仰いで：現在、学習支援、子ども食堂などの奉仕をおこなっています。信者ではない人々の協力、参加があるのはとてもうれしいです。また地域の方々が食材などを提供してくださるのもありがたいです。

周囲の人々との関わり：教会の中に入りにくい、入ってはいけないという先入観を払拭するために、バザーや講演会等、教会の行事に気軽に参加できるように信徒は近隣の方に声かけをする努力が必要ではないでしょうか。

人との接点を求めて：ミサ後、教会内でカフェをおこなってきました。カ

フェが人との接点となっているのは事実です。しかし、新しい人が入りにくいという課題も抱えています。

孤独を乗り越えて: 孤独死となった信徒をきっかけに高齢者への訪問活動を行っています。

◆提言◆

新しい共同祈願と祈り: みことばと祈りがひとつであるようにと願うところから、隣人への「愛の奉仕」が生まれると思います。「愛の奉仕」はみことばと祈りに支えられます。愛のわざを育むような新しい共同祈願をミサの中でささげられたらよいと思いますし、愛のわざへと駆り立てるような祈りの定式文があったらよいと思います。

個人主義を乗り越えて: 自分の殻を超えての愛の行為へ踏み出せるように、司教様が個々の信徒を励ましてください。特に小教区の仲間たちと協議し助け合って愛の実践を行っていくことをお勧めください。

各種活動のネットワーク化: 各小教区でおこなっている「愛の奉仕」の個別の活動を分類し、グループ別の小教区間の交流を進めてください。

障がい者への取り組み: 教会内における障がい者に関わる課題に対して、司祭や司祭の代行となる方々が的確なアドバイスが受けられるような「サポート機能」が教区にあったらと考えます。

ひとこと

教会の特徴に「仕える」(ディアコニア)と「交わり」(コイノニア)があります。教会の中にはいつも互いに仕え、支え合う交わりの関係が生まれます。教区内に数多くの「愛の奉仕」が実践されていることが寄せられた回答より明確になりました。しかし、高齢化、後継者不足、資金の欠乏など抱えている問題がハッキリとしなかったのは残念です。東京教区では様々な「愛の奉仕」を実践されてきましたが、教区全体でそれを包括するような「教区カリタス」のような組織は今後必要となると考えています。

■説明■

2011年3月11日に生じた東日本大震災と大規模な津波、そして原発事故を通じて、わたしたちの社会は多くのことを学びました。そして、復興の途上にある被災地の方々への関わりは、継続して行われています。将来、首都圏でも大きな災害が起こった際、小教区がどのような対応を取れるかを今のうちに検討する必要があるでしょう。

●現状●

地域の人々への提供：東日本大震災以後、教会が近隣の人々の臨時の避難所になる場合を想定しています。毛布・カンパン・水・簡易トイレなどの防災用品を備えています。カンパンの保管期限切れのとき信徒に配ることが、防災意識の喚起にもつながっています。

防災体制の検討：近い将来おこるであろう関東直下型地震に備え、防災体制を検討しています。年に一回の避難訓練だけでなく、実際に災害が起きたときの対応を検討しています。備蓄品の充実・マニュアル作成だけでなく、近隣施設と連携し、自治体とも協力して、町内会や警察・消防とも連絡を取りつつあります。

常日頃からの地域との連携：小教区が備蓄品を備えるというのには限界があると思います。まずそれぞれの地域との連携が必要でしょう。自治会などとの連携を常日頃から図ることが大切となります。

耐震補強工事：安全率をかなり上げた即時倒壊を免れる程度をはるかにしのぐ強度までの耐震補強工事を実施しました。施設全体を避難所・休憩所として開放する用意をしています。また地域に対しても防火水槽を構内に設けるなど自他への支援が出来るように計らっています。

◆提言◆

教区全体の取り組み：東京全体の中での自教会の空間的位置、交通経路的

な性格をしっかりと把握しておくことも重要であると考えられます。その上での近隣教会との連携のためには宣教協力体とも違うレベルでの教区的指導が求められるところかと思います。

食料の備蓄：東京教区での災害への備えとして小教区ごとに食糧の備蓄を行い、その一部を海外の食糧難の地域に送るシステムをつくることを提案します。

修道会の施設の活用：災害が起きた場合、要援護者や女性等の一時的な避難場所としての女子修道会の施設を活用することを提案します。

被災地への継続的な支援：被災地の災害を風化させない為の若者による被災地への継続的な支援と、そこで学んだ災害時への備え・ノウハウの蓄積。

教区内のコンセンサス：今後の大規模震災などへの対応のために、教会を信徒または近隣住民のための一時避難所として整備することについて、大司教区としてのコンセンサスを整理するよう提言します。必要によって、寝具、食料、電源設備などを具備するための資金的支援が必要になると考えます。

ひとこと

小教区共同体によって取り組みが異なることがわかりました。災害に対して組織的な対応が求められているでしょう。災害に向けての取り組みを包括するような教区カリタスといったものが必要となると思います。また、多くの人材を東京の教会は抱えています。貴重な人材のリソースが未分化のままにしているのは残念です。災害に際しての役割分担などを教区単位で明らかにする必要があると思います。

今後の展開：宣教司牧方針策定を目指して

以上、皆さまから寄せられた各課題についての回答を現状と提言の観点からまとめ、さらにそれぞれの課題の解説と回答に対する所感も加えました。皆さまにとってはどのような感想、気づきなどがありましたでしょうか。

今回の貴重な回答を無駄にしていけないためにも、また宣教司牧方針を豊かなもの、信徒の皆さんの思いが反映したものとするためにも、さらなる設問を用意しましたので、小教区で、グループで、修道会で、あるいは司祭団で話し合っていただきたいと思います。設問は以下の通りです。

1. 10 の課題の中でどの課題のまとめが印象的でしたか？
2. 10 の課題のまとめの中で、何か気づいたことがありますか？
3. 10 の課題を受けて、あなたが属している信仰共同体（小教区、修道院など）ではどの点から、どのような取り組みを果たせますか？
4. 多様化する現代日本社会の中で、教会が果たす役割とはいったい何でしょうか？
5. 教皇フランシスコの来日の際のメッセージや社会に対する影響力などを参考にしながら、わたしたちのカトリック教会はこれから、日本の社会でどのような存在となればよいと思いますか。

以上の設問について、自由に話し合い、意見を分かち合って、前回同様、レポート（提言）をご送付ください。話し合いと提言にあたっては、以下の諸点を心にとめてください。

1. 個人の意見ではなく、必ず複数の方で意見の交換をお願いします。
2. どのような集まりでも構いませんが、必ず、祈りをもって話を始め、祈りをもって終わってください。
3. 提言はパソコンなどでワードのA4サイズで作成してください。差し障りがなければ、話し合われた方のお名前と所属小教区、あるいは修道会名を明記してください。
また一つの項目についてはA4で2ページを超えることのない程度に、まとめてください。
4. 積極的に前向きで、教区の福音宣教をより良くするための提言をお願いいたします。
5. 提言はメールにワード文書を添付して送付ください。
「件名」は、「宣教司牧方針」とご記入ください。

提言送付のためのアドレスを用意しました。

以下のアドレスは2020年6月15日まで有効です。なお提言送付以外の目的では、このアドレスをお使いにならないでください。

メールアドレス：**dawatrim@gmail.com**

メールを使われない方は、教区本部に郵送ください。

郵送の際には、封筒に、「宣教司牧方針」と明記ください。

メールも郵送も締め切りは、**2020年6月1日（月）**です。

みなさまのご協力を、心からお願い申し上げます。

2020年2月

東京教区宣教司牧方針策定のための取りまとめ作業グループ



カトリック東京大司教区

〒112-0014 文京区関口 3-16-15 東京教区本部事務局

Tel 03-3943-2301 Fax 03-3944-8511